

2010年度の検査室は、前年度に引き続き7人体制でのスタートとなった。

超音波検査を担当する技師を拡充すべく、前年度から引き続き研鑽に励んだ。

また、検体検査スタッフの業務にかたよりがないよう半日1名の支援を行い、病棟回診参加や適正な代休取得に努めた。

リスク管理の点からも、毎朝の部署内朝礼を行い、リアルタイムな情報の伝達と共有及び問題解決の場とした。その他、ワーク・ライフ・バランスの概念を取り入れ有休休暇と代休消化率を高めるとともに自己研鑽の機会を増やすべく努めた。

【検体検査】

前年度の電子カルテ導入に関し、輸血・細菌・病理の各システム構築を完了し、電子カルテの本稼動に対処した。引き続きシステムと運用の改善に取り組んでいきたい。

免疫血清分析装置は、導入の意義があると考えるが高額なため整備に至っていない。中長期の機器整備計画が重要と思われる。

回診業務に関しては、NST、褥瘡及びICTに常時1名が

参加、情報提供を行っているが、医師不在時は、可能などろから他部署と共に情報収集するよう努めている。これは、検査室全員のバックアップがあつてこそ成り立っている。

【生理検査】

検査時間の待ち時間短縮と常時検査実施ができるよう努めた。これは現在の主担当者の日々の労力に負う処が多く、後継技師の技術習得が期待される。今年度は、2名の超音波検査士の合格をすることができた。現在の超音波担当技師の超音波検査士資格認定を含めたスキルアップの継続した教育・研修の時間、資材等の物心両面での支援も続けていかなければならない。

【今後の展望】

特に超音波検査技術は、すぐに習得できるものではないが、順次新たな技師が研修に加わり検体検査分野とのローテーションを進めていきたい。生理検査担当者も時間外帯を不安なく対応できるように検体検査の理解を深め、地域医療に最良の臨床検査が提供できるように目指していきたい。

